

会員だより

「川への思い」

福島県三春土木事務所
業務課 技師
片 寄 明 季

福島県土木部に採用となって8年目。私は川に興味を持ち、この職に就きました。これまでの仕事や体験を通して思ったこと・感じたことがたくさんあります。文章にする事で散らばったままの考えをまとめたいと思います。

1. 川への興味

まず、土木の世界をめざすきっかけとなる出来事がありました。

小学4年生の私は、大好きだった遊び場が親水公園になっているのを見て、愕然としました。コンクリートブロックの飛び石の様な物が作られていたからです。水へ入るのに丁度良い斜面や手掛かりになる葦。それがなくなっていたのです。一緒に歩いていた母に怒りながらこう言いました。「こんなのがあったら遊びづらいただけだし、なくても遊びたきゃ勝手に遊ぶよ。どうして子供の意見を聞かないの。それだったら、自分で作ってやる！」(小学生が言うことなので大目に見てください。)

2. 水と生活

博物館や自然観察会などで見聞きし体験したことで、なぜ人は水への関心が薄れたのだろうと考えるようになりました。

今と昔で大きく変化したのは、水辺に行かなくなったことではないかと思います。

第一に、生活形態。炊事・洗濯で川や井戸から水を汲む作業がなくなりました。蛇口をひねればきれいな水が簡単に手に入ります。

第二に、第一次産業に携わる人の減少。農作物・

木材・魚の成長に、水がどれだけ大切か知っている人が減りました。

第三に、遊びの形態。屋外から屋内に変わりました。

ゆえに排水に気を使わなくなり、川が豊かさや恐ろしさの両面を持っていることを忘れ、忘れる事で無関心となり、それが自然と人の関係に歪みをもたらしたのだらうと思います。

3. 体験から学ぶこと

一個人として水辺で遊ばないなんて損していると思うし、仕事上の立場では河川関係に取組む市民団体を中心とした活動などを通して、もっと多くの人に川のことを知ってもらいたいのです。「川は危険だ」と遠ざけるのではなく、「何がどう危ないから、こうしてはいけない」を学習したうえで危険を回避する力を身に付けることができれば、川や水辺で楽しく遊び・学べるでしょう。

川だけに限らず、遊びを通して得るものは成長



夏の楽しみ (一番奥)

会員だより

に大きく関わります。私の場合は田畑の手伝い、カブトムシ捕り、用水路釣り、アケビの蔓で谷渡り、砂利道で水たまり遊びなどから観察や危険予知を学びました。これらの体験は自身を作り、今でも役に立っています。

4. しみじみと…

旅をするとその土地の生活が見えます。島原へ行った時のことです。まちの至る所から湧き出る水を共同洗い場として利用し、それを地元で管理している体制があることに驚きました。湧き水が生活の一部であり大切にしていることが分かりました。

ここで気付かされたのは住む人・利用する人の意識が重要で、それが人の行動に反映されるということです。例えば、エコ活動。何年も前から叫ばれていた地球温暖化問題が異常気象として実感するようになり、必要性を意識する人が増えたため普及してきていると考えます。

外に出て異なる生活様式を見る事で、私はそれに気付いたのです。同時に、行政は気付いてもらう取組みに力を入れるべきなのかなと感じたし、それに携われたら面白いなと思いました。

5. 外に出て内を知る

今では楽しみながら遠くへ出かけられるようになりましたが、以前は不安ばかりで知らない土地へ一人で出かけるなんてあり得ませんでした。行動範囲を広げられたのは友達の一語です。「口と耳があれば知らない場所にも行ける。分からないことは聞けば済むでしょう。同じ日本語なのだから。」素直に合点がきました。そして国内であっても海外であっても、自分が育った文化と比較するのが楽しみの一つとなりました。そうすることで、地元の文化、日本の文化を見つめ直せるからです。友達と二人、ドイツへ行った時のこと。料理はおいしかったのですが飽きてしまい、ご飯とみそ汁を求め、彷徨い歩くことで日本人であると強く感じました。



フランクフルトにて



マイン川

6. おわりに

以上のように思いを巡らせると様々なことが見えてきます。身近にある水や川について行政、住民それぞれの立場で今後どうしていきたいか、どう連携をとるかが重要であり、それを考える為にも、見聞を広げ自分達のルーツである文化を振り返る必要があると考えます。

知らないことがまだまだあります。これからも「面白い」を原動力に、各地を探検したいと思います。